

## 看護学生の「看護」に対する認識の変化（第2報）

関谷 由香里\*，和田 由香里\*，青木 光子\*，  
岡田 ルリ子\*，徳永 なみじ\*，岡部 喜代子\*

### Changes in the Awareness of the Nursing Among Nursing Students (II)

Yukari SEKIYA, Yukari WADA, Mitsuko AOKI,  
Ruriko OKADA, Namiji TOKUNAGA, Kiyoko OKABE

#### 序 文

看護基礎教育において、看護学生が看護学を学ぶものとして、「看護」に対する自らの認識をもち、それを自らの言葉で表現し、発展させていく能力をもつことは非常に重要である。したがって、特に看護基礎教育機関では、このような看護学生の「看護」に関する認識の変化や看護観の形成過程を追究するための多くの研究がなされている。本研究の計画立案の際、データベース医中誌WEB（2005年13号データ）を、「看護教育」「看護」「認知or認識」をキーワードとして検索した結果、検索年2000～2005年で758件の文献が検出された。その中には、短大看護学生を対象として、各年次で「看護」に対する認知について調査したもの<sup>1)</sup>、1年次と卒業時で「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージについて調査したもの<sup>2)</sup>、臨地実習と看護者としての認識の発展過程について調査したもの<sup>3)</sup>、臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響について調査したもの<sup>4)</sup>等があった。

また、看護大学生を対象とした調査では、看護学生の看護に関する認識について、入学時と1年終了直前に調査し、比較・検討した報告<sup>5)</sup>がみられた。しかし、この報告以外の、看護大学生を対象とした研究報告は、いずれも横断的研究であった。

そこで、平成17年度より、E大学の看護学生の4年間の「看護」に対する認識の実態とその変化について把握することを目的に、E大学のカリキュラムの進度に沿って、看護学生の「看護」に対する認識に関する横断的研究を開始した。平成17年度の入学生に研究協力を得て行った、第1回目（入学時）の調査結果（以下、前回の調査結果という）として、入学時の学生には、「看護」に対する認識に先立つ「看護」およびその関連領域の正しい知識がほとんどないため、質問紙の設問の意味が正しく理解できていないという状況がみられたこと、さらに、記

述内容を分析すると、すべての記述が、認識の発展の第1段階である、認識の対象を具象的に捉えたものであったということは既に報告した<sup>6)</sup>。

本稿では、平成17年度の入学生を対象とした第2回目の調査結果ならびに、その調査結果と前回の調査結果を比較・検討した結果について報告する。

#### 研究目的

E大学の看護学生の「看護」に対する認識の実態、ならびにその変化を把握する。

#### 概念枠組みと用語の操作的定義

認識とは、庄司の「認識＝思考＋知識」<sup>7)</sup>と規定する。そして、ここでいう「看護」に対する認識とは、「看護」の目的・対象・役割・機能、「看護」に必要な技術、「看護」の専門職としての能力向上に必要な取り組み、「看護」の対象との人間関係形成に必要な要因、「看護」が行われる場の7項目について、看護学生が臨地実習を含む個々の学習過程で理解し、統合して知りえた事柄を指す。「看護」に対する認識の発展段階としては、看護学生が「看護」について思考し、自らの言葉で表現できることを一つの基準とした。

本研究では、庄司<sup>8)</sup>戸坂<sup>9)</sup>の論を参考に、認識の発展に関する概念枠組みを提示した（図1）。横軸を時間とし、縦軸を認識の発展段階とした。認識の発展は漸進的であることを反転した矢印で示し、認識の発展を示す三段階の説明を各矢印に付した。また、反転した矢印の大きさは、教育課程に応じて（右上に向かって）増加する知識と学習経験に比例して、「看護」に対する認識が広がっていく状態を示している。さらに、反転した矢印の中の上向き・下向きの矢印は、庄司<sup>10)</sup>のいう「ヨリ確実・ヨリ充実・ヨリ完全」な認識への発展過程で重要な認識運動としての「のほりおり」を表した。

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

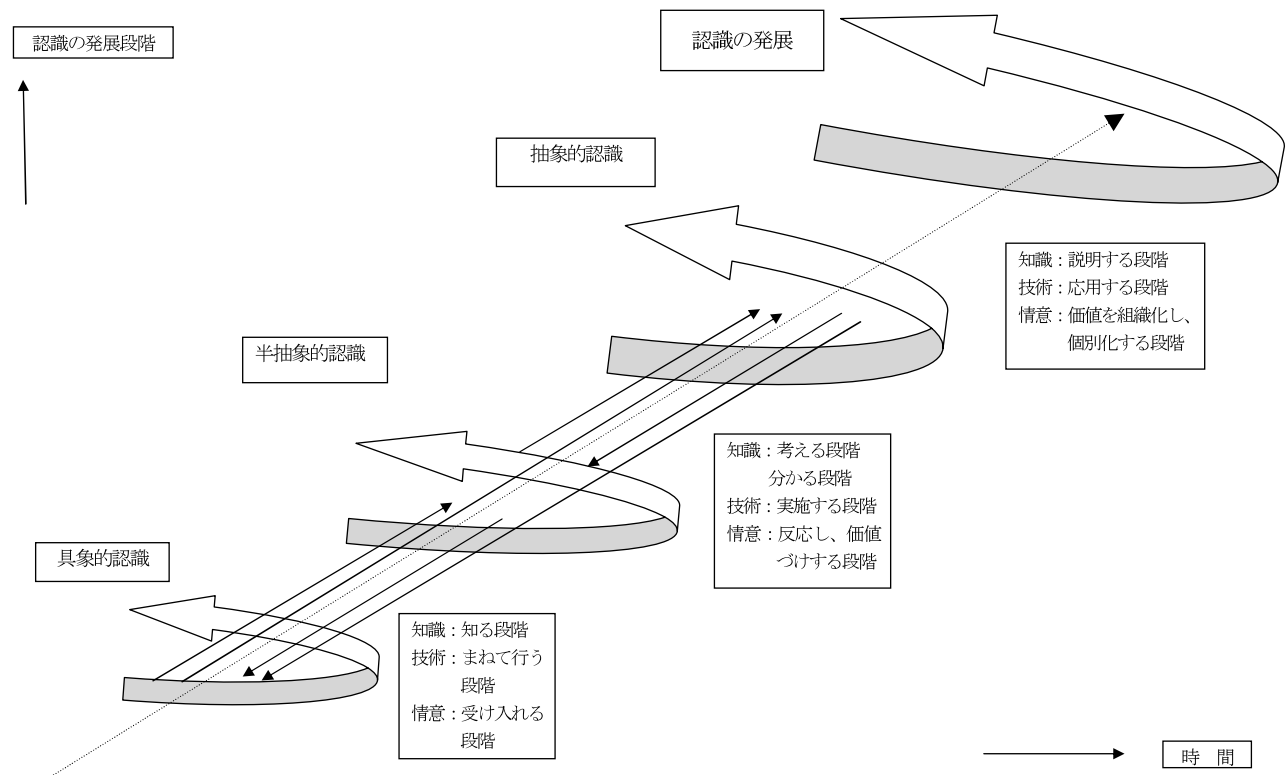


図1 概念枠組み

## 研究方法

1. **研究対象**：E大学看護学科平成17年度入学生60名の質問紙に記された回答記述
2. **研究デザイン**：縦断的研究，質的記述的調査型デザイン
3. **研究期間**：平成17年4月～平成21年3月
  - 1) **縦断的研究**：4年間の質問紙による認識調査の時期  
4年間の調査の時期は，カリキュラムの進度，並びに先行研究を検討した結果，看護学生の看護に対する認識に最も影響を与えられと考えられる，各学年の臨地実習後に，看護の専門科目がほぼ終了する各看護学実習前と入学・卒業時を加えて設定した。

前回の調査結果の報告では，第2回目の調査時期を，基礎看護学実習Ⅰ-A終了直後に設定していた。しかし，本実習終了後，集中講義と再試験が組まれており，この時期は長期夏季休暇前で，研究協力を求めた学生たちは公私共に過密なスケジュールに追われていた。そのためか，質問紙調査に協力が得られたのは2名で，一部の設問にしか回答記述がなされていなかった。この結果をもとに，カリキュラムに沿った「看護」に対する認識に関する質問紙調査の時期については，少しでも多くの学生の研究協力を得るために，カリキュラムにもゆとりがあり，学生が長期休暇に入る前を避けるように修正を行い，以下の通り再設定した。

- ①平成17年4月11日～4月18日：入学時（1年次初め）

- ②平成18年4月初旬：基礎看護学実習Ⅰ-B終了後（2年次初め）
- ③平成19年4月初旬：基礎看護学実習Ⅱ終了後（3年次初め）
- ④平成19年8月前期試験終了後：各看護学実習前（3年次後期前）
- ⑤平成20年4月：各看護学実習3クール終了後（4年次初め）
- ⑥平成20年8月：全看護学実習終了後（4年次後期前）
- ⑦平成21年3月：E大学卒業直前

## 2) 第2回目の調査期間

第2回目の調査は，上記の②に該当し，調査期間は，平成18年4月10日～4月24日であった。前回の調査時期から今回の調査までの間，つまり，1年次に学生が学んだ「看護」の専門科目は，看護学概論，基礎看護技術Ⅰ，基礎看護学実習Ⅰであった。「看護」の関連領域としての科目は，医療概論，人体の構造と機能，生命活動と代謝，疾病発生の機序，感染免疫学，食と栄養，であった。これらの科目に加え，一般教養の科目である基礎科目群から指定された科目を履修した。

## 4. データの収集方法

データの収集は，前回の調査同様，本研究を通じて使用する質問紙を使用し，自記式質問紙調査法（留め置き

法)を用いた。前期授業開始初日の平成18年4月10日に、平成17年度の入学生60名に、研究協力の依頼文書を配布して、研究目的ならびに倫理的配慮について説明を行い、質問紙を配布した。質問紙は資料1を参照されたい。

設問の内容は、「[看護]に対する認識」の操作上の定義の項で、認識の内容として示したように、「看護」の目的、「看護」の対象、「看護」の役割/機能、「看護」に必要な技術、「看護」の専門職としての能力向上に必要な取り組み、「看護」の対象との人間関係形成に必要な要因、「看護」が行われる場についての7項目である。

## 5. データの分析方法

データの分析方法は内容分析<sup>1)</sup>を用い、基本的分析単位は文とした。カテゴリーの細分化と特定シンボル(語)

(脚1)の対応表は表1を参照されたい。各設問に対する記述を、一つの文章あるいは語が一つの意味をもつように文章化し、複数の研究者で特定シンボルを確認しながら、サブカテゴリーに振り分けた。

## 6. 倫理的配慮

質問紙調査への協力依頼時に、文書にて、研究の目的、研究への協力は任意であること、質問紙への回答をもって同意が得られたものとする事、プライバシーの保護ならびに研究対象者への情報開示、データは研究関係者のみが取り扱うこと、データ処理の際、個人が特定されることはないこと、研究結果を本学の紀要等に公表することを説明した。また、研究への協力の如何や質問紙への回答内容は学業の評価とは全く関係のないことも伝えた。

## 結 果

今回の調査では、60名の学生のうち8名から回答を得た。質問紙の回収率は約13.3%であった。8名の学生から95の記述が得られた。前回の調査と同様に、「看護」に関する7項目の設問に対する学生の記述を、加工しないでまとめたものが表2である。表の中、記述内容の欄の( )は同一回答数を表している。また、データの分析方法にしたがって、表1のカテゴリー別に学生の記述を振り分けて、記述の数をまとめたものが表3である。記述の内、特定シンボルに該当しないものは除外した。表の右の欄は、表2の記述件数に対する表3の記述の数の割合を示している。以下、文中では、表2のデータは[ ],表1のサブカテゴリーは【 】で示している。

### 資料1

看護研究：「看護」に対する看護学生の認識の変化

看護学科2年生  
平成18年4月

#### 質問紙調査用紙

以下の言葉や文章について、あなたが知っていること、考えること、イメージすることを、あなたが思い浮かざり自由にお書きください。

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 1. 看護は何をめざして行うと思いますか。           | 5. 自分の、看護職としての能力を高めるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。 |
| 2. 看護の対象となる人達はどのような人達だと思いますか。   | 6. 看護の対象とより良い人間関係を作るためにはどのようなことが重要だと思いますか。   |
| 3. 看護職はどのような仕事をするとと思いますか。       | 7. 看護は、社会のどのような場所で行われると思いますか。                |
| 4. 看護に必要な技術には、どのようなものがあると思いますか。 |  |

ご協力、ありがとうございました。  
(実寸はA3用紙1枚)

## 1. 第2回目調査時の「看護」に対する認識

### 1) 「看護」の目的

[患者の自立を手助けする]、[対象の病気を治すこと]という、具象的な表現の記述から、[健康障害の回復]、[健康増進]という半抽象的な表現の記述がみられ、認識の発展段階としては、第1段階から第2段階であった。

### 2) 「看護」の対象

[身体・精神が病んでいる人]、[日常生活において必要な動作ができずに援助が必要である人]という具象的な表現が多かった。[すべての人]という抽象的な表現もみられたが、[すべての人]は既習の知識であり、知らなかったことを知った段階、つまり、認識の発展段階としては、第1段階であった。

### 3) 「看護」の役割・機能

[医師の補助]、[対象の病気によって起こる苦痛を減らすこと]などの具象的な表現が多く、サブカテゴリーの【身体的援助】に含まれる記述が多かった。認識の段階としては、第1段階から第2段階であった。

### 4) 「看護」に必要な技術

【コミュニケーション技術】という抽象的な表現が多かったが、一方で、[医療器具を扱う技術]など【診療に伴う援助技術】に含まれる半抽象的な表現もあった。認識の段階としては、第2段階であった。

### 5) 「看護」の専門職として能力向上に必要な取り組み

この設問に対する記述は、看護専門職としての取り組みではなくて、看護学生である自らを中心とした[看護の技術を磨くこと]、[看護に必要な知識を得ること]、[経験をつむ]などの半抽象的な表現が多かった。認

表1 カテゴリーの細分化と特定シンボルの対応表

カテゴリー	サブカテゴリー	特定シンボル
1 看護の目的	健康に関するニーズの充足	健康の回復・維持・増進, 疾病の予防 生活の質の回復: もとの生き方に戻る, 健康快適な生活, 社会復帰 対象の幸福, 安らかな死への援助, 苦痛の緩和
2 看護の対象	すべての人々	身体的・精神的に問題を抱えている人: 病気を抱えている人 (病気の人), 病気になりそうな人 援助を必要とする人: 健康を願う人, 家族が援助を望む人, 生活に支障がある人, 対象の家族 健康な人, 地域の人
3 看護の役割・機能	身体的援助 → 精神的援助 → 教育・指導 → 物理的・化学的・社会的環境調整	排泄のケア, 清潔のケア, 環境調整, 身体の状態の把握 思いやり, 心のケア, 心の状態の把握, 観察, 励ます, 認める, 支援する 対象の自立のための知識・技能の伝達, 療養上のアドバイス 医師や医療関係者との連携, 家族への配慮
4 看護に必要な技術	コミュニケーション技術 日常生活援助技術 診療に伴う援助技術 (観察・測定の技術) 教育・指導技術	*具体的な技術項目が該当する。
5 看護専門職としての自己成長	看護専門職としての知識 → 看護専門職としての技術 → 人間性 → 経験 →	勉強して専門的な知識を得る 実践的な技術を身につける, 正確な技術を身につける 社会的な視野を広げる 経験をつむ, 経験に対する積極的な姿勢
6 看護の対象との人間関係	対象の尊重 対象の理解 相互交流	個人として尊重する 対象のことをよく知る, 対象を理解しようと努力する, 対象の立場への変換 良い聞き手になる, 対象の思いの表出を促すように関わる, 話す機会を多くもつ
7 看護実践の場	対象がいる場 社会のあらゆる場所	自宅・家庭, 病院, 学校, 老人保健施設, 保健所, 養護施設, 障害者施設 地域, 会社

識の段階としては、第2段階であった。

6) 「看護」の対象との人間関係形成に必要な要因

[うわべだけではなく、対象の深いところまで知ろうと努力すること], [相手と接する機会をもち、表情や言葉に注意を傾ける] などの具象的、あるいは半抽象的な表現が多く、認識の段階としては第1段階から第2段階であった。

7) 「看護」が行われる場

特定シンボルにあげた場の具象的記述が多かった。しかし、[すべての場所] という抽象的な表現もみられたが、これは、上述2) の [すべての人] と同様と判断し、認識の発展段階としては、第1段階であった。

2. 前回の調査結果との比較

1) 記述の数の変化

「看護」に関する7項目の設問のうち、「看護」の役割・機能 (17/95, 17.9%) と「看護」が行われる場 (18/95, 18.9%) に関する記述が多かった。前回の調査では、「看護」に必要な技術に関する記述 (24/121, 19.8%) が多かったが、今回の調査では、95の記述の内11 (14.7%) であった。「看護」が行われる場については、列挙されている施設を個別に計上しているため、他の設問に対する記述より数が多くなった。今回の調査では、表2にあるように、いくつかの施設を組

み合わせた回答が多かった。

今回の調査では、質問紙調査に協力が得られた学生の人数は、前回の調査より1名少なかった。したがって、記述の数は当然減少したが、26もの減少がみられた。

2) 記述内容の変化

認識の表現である記述内容をみみると、今回の調査では、表2の記述のように、全体的に専門用語で簡潔に記述されている語あるいは文章が多くなった。これらの語あるいは文章は、表1の特定シンボル (具象的表現) からサブカテゴリー (半抽象的から抽象的表現) に該当するものが多かった。また、表3から、前回の調査でみられた、設問が求める記述の内容と齟齬のある記述が減少した。

考 察

1. 「看護」に対する認識の発展段階

結果1より、平成17年度の入学生の2年次初めの、「看護」に対する認識の段階は、前回の調査結果の、認識の [前段階から第1段階] からさらに、認識の [第1段階から第2段階] へと発展がみられた。このことは、認識の発展という点で、近藤ら<sup>5)</sup>の報告と同様であった。これは、2年次の初めには、1年次の学習によって、設問の意

表2 質問紙調査結果

設問	記述内容	全回答数に占める割合
1. 看護は何をめざして行うと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の自立を手助けする(2)</li> <li>・社会全体がよりよい環境になること</li> <li>・対象の病気を治すこと(2)</li> <li>・対象の病気によって起こる苦痛を減らすこと</li> <li>・すべての人間の健康や幸福を追求する</li> <li>・患者さんが元気になること</li> <li>・患者さんの安楽</li> <li>・健康障害の回復</li> <li>・健康増進</li> <li>・疾病予防</li> </ul>	12/95
2. 看護の対象となる人たちはどのような人たちだと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体・精神が病んでいる人(4)</li> <li>・精神的・身体的な病気によって、精神・身体が少なからず弱っている人</li> <li>・日常生活において必要な動作ができずに援助が必要である人</li> <li>・精神的あるいは身体的に不快であると感じている人</li> <li>・病気になっている人、またはその周りにいる人</li> <li>・すべての人(2)</li> </ul>	10/95
3. 看護職はどのような仕事をすると思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医師の補助(処置の手伝いをする)(3)</li> <li>・患者の体調管理(入院患者)</li> <li>・対象のことを理解し、アセスメント、ケア、対象の回復について考え、実践する(2)</li> <li>・対象の病気によって起こる苦痛を減らすこと(2)</li> <li>・対象が病気によってできなくなったことを対象が変わって行う</li> <li>・自立と自律への協力</li> <li>・疾病回復の援助</li> <li>・健康促進</li> <li>・心や身体が病んでいる人を助ける</li> <li>・健康指導</li> <li>・精神的サポート(患者・家族)</li> <li>・患者の看護・介助の援助</li> <li>・医療スタッフとの協力</li> </ul>	17/95
4. 看護に必要な技術には、どのようなものがあると思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護技術</li> <li>・コミュニケーション技術(話術)(6)</li> <li>・医療器具を扱う技術</li> <li>・最新の医療技術に伴う援助技術</li> <li>・様々</li> <li>・対象を観察する能力</li> <li>・チームワーク</li> <li>・注意力・集中力</li> <li>・清潔、安全、移送、排泄・食事の介助、創傷処置など(1文として計上)</li> </ul>	14/95
5. 自分の、看護職としての能力を高めるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション能力を高めるため、多くの人と接する(2)</li> <li>・自己学習・自己練習</li> <li>・看護の技術を磨くこと(2)</li> <li>・知識を身につけること(2)</li> <li>・看護に必要な知識を得ること(3)</li> <li>・演習で学んだことを繰り返し実習で活かす</li> <li>・経験をつむ</li> </ul>	12/95

6. 看護の対象とより良い人間関係を作るためにはどのようなことが必要だと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うわべだけではなく、対象の深いところまで知ろうとする努力をすること(2)</li> <li>・信頼関係の構築</li> <li>・対象の気持ちを理解できる力</li> <li>・上手に話ができること</li> <li>・対象を励ましたり、元気づける力</li> <li>・相手と接する機会をもち、表情や言葉に注意を傾ける</li> <li>・時間がかかってもあきらめない</li> <li>・一般的な人間の体や心について知る</li> <li>・個々人の性格や習慣等を見極める</li> <li>・誠意をもって接すること</li> <li>・相手を思いやる</li> </ul>	12/95		
7. 看護は、社会のどのような場所で行われると思いますか。	<table border="1"> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(在宅看護)(2)</li> <li>・地域(2)</li> <li>・無回答</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;施設ごと&gt;</li> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(2)</li> <li>・地域(2)</li> </ul> </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(在宅看護)(2)</li> <li>・地域(2)</li> <li>・無回答</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;施設ごと&gt;</li> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(2)</li> <li>・地域(2)</li> </ul>	18/95
<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(在宅看護)(2)</li> <li>・地域(2)</li> <li>・無回答</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;施設ごと&gt;</li> <li>・病院(5)</li> <li>・学校(2)</li> <li>・福祉施設</li> <li>・診療所</li> <li>・保健所</li> <li>・会社</li> <li>・すべての場(2)</li> <li>・家庭(2)</li> <li>・地域(2)</li> </ul>			

味を正しく理解し、専門用語を用いて回答できるレベルまで、「看護」の専門知識が獲得されていたことによると考えられた。このことは、認識が発展するというものについて庄司が、「今まで知らなかったことを知るようになったり、これまで感覚的にしかとらえていなかったものを理論的にとらえるようになったりすること」<sup>12)</sup>と述べている、認識の発展段階に入っていることを意味していると考えられた。

特に、回答記述にみられた抽象的表現は、既習の知識が反映されていると考えられた。また、前回の調査でみられた、「看護」の専門知識の不足による、設問と回答記述との齟齬がみられなかったことも、「認識=思考+知識」<sup>7)</sup>の知識を獲得したことによるものと考えられた。ただし、認識の発展としては、榊原の報告<sup>13)</sup>にもあるように、1年次は講義が中心で、認識運動の「のぼりおり」の「のぼる」道をたどっている段階であったと考えられた。

## 2. 「看護」に対する認識の内容の変化

結果1.の4)の「[看護]に必要な技術」に対する回答記述では、【コミュニケーション技術】が圧倒的に多かった。【コミュニケーション技術】は抽象的表現であるが、具象的・半抽象的表現がなされた記述、つまり、「おりる」道をたどったと捉えられる記述は確認できなかった。しかし、1年次末の基礎看護学実習Iで、初めて臨床に出て、対象者の方との関わりを通して、コミュニケーションすることの難しさを実感したという体験が、わずかではあるが、前回の調査よりデータ数の増加として現れていると考えられた。つまり、具象的・半抽象的には表現されなかったが、臨地実習で得られた体験によって、「認識の中身が

表3 カテゴリー別分類表

カテゴリー	サブカテゴリー	特定シンボル	データ数	※表3 / 表2	
1 看護の目的	健康に関するニーズの充足	健康の回復・維持・増進, 疾病の予防	6	11/12	
		生活の質の回復: もとの生き方に戻る, 健康快適な生活, 社会復帰	2		
		対象の幸福, 安らかな死への援助, 苦痛の緩和	3		
2 看護の対象	すべての人々	身体的・精神的に問題を抱えている人: 病気やケガを抱えている人, 病気になる人	6	10/10	
		援助を必要とする人: 健康を願う人, 家族が援助を望む人, 生活に支障がある人, 対象の家族	2		
		健康な人, 地域の人	0		
3 看護の役割・機能	②	身体的援助	排泄のケア, 清潔のケア, 環境調整, 身体の状態の把握	8	17/17
		精神的援助	思いやり, 心のケア, 心の状態の把握, 観察, 励ます, 認める, 支援する	2	
		教育・指導	対象の自立のための知識・技能の伝達, 療養上のアドバイス	3	
		物理的・化学的・社会的環境調整	医師や医療関係者との連携, 家族への配慮	4	
4 看護に必要な技術		コミュニケーション技術	*具体的な技術項目が該当する。	6	11/14
		日常生活援助技術	〃	2	
		診療に伴う援助技術 (観察・測定の技術)	〃	3	
		教育・指導技術	〃	0	
5 看護専門職としての自己成長		看護専門職としての知識	勉強して専門的な知識を得る	5	12/12
		看護専門職としての技術	実践的な技術を身につける, 正確な技術を身につける	4	
		人間性	社会的な視野を広げる	0	
		経験	経験をつむ, 経験に対する積極的な姿勢	3	
6 看護の対象との人間関係		対象の尊重	個人として尊重する, 対象の権利を尊重する	1	11/12
		対象の理解	対象のことをよく知る, 対象を理解しようと努力する, 対象の立場への変換	6	
		相互交流	良い聞き手になる, 対象の思いの表出を促すように関わる, 話す機会を多くもつ	4	
7 看護実践の場		対象がいる場	自宅・家庭, 病院, 学校, 老人保健施設, 保健所, 養護施設, 障害者施設	18	18/18
		社会のあらゆる場所	地域, 会社	T 90	

個別性や特殊性をとりいれてますます豊かに満たされていくこと<sup>14)</sup>という、認識の発展の「おりの」道をたどったことを示していると考えられた。

また、表2にあるように、[チームワーク], [注意力・集中力]などの記述がみられ、「[看護]に必要な技術」と能力や協調性などの人間性との混同がみられたものの、これらは、「看護」を実践する際に要求されるもので、初めての臨地実習の体験に基づく回答であると考えられた。技術に関する認識に、技術を行う際の能力や態度が含まれたということは、「[看護]に必要な技術」に対する認識の内容が、臨地実習という体験主導の「おりの」道をたどって豊かになっていることを示していると考えられた。

このように、臨地実習が、認識運動の「のほりおり」の「おりの」道をたどる契機となっており、認識が発展する重要な学習形態であることが明らかになった。今後、平成17年度の入学生が、「看護」に対する認識を発展させるために、「看護」の専門知識を着実に獲得し、思考するための教授—学習方法と、認識を発展させる臨地実習における、認識運動の「のほりおり」を促すような指導の在りかたを検討して行きたい。

## 謝 辞

本質問紙調査にご協力いただきました、E大学看護学科平成17年度入学生の皆様、本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

## 脚 注

- 1) 内容分析でいう特定シンボルは、一般的には「語」を指すが、本研究では、設問に対する回答の記述の性質上、分析単位である「文」も配置した。

## 引 用 文 献

- 1) 山内葉月 (1997) : 看護意識の啓発に関する研究 第4報—短大看護学生の看護認知の変化, 入学から卒業まで—, 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 7, 1-10.
- 2) 渡邊裕美, 杉山敏子他 (1996) : 看護学生の卒業時における「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージの変化—年次と比較して—, 東北大学医療技術短期大学紀要, 5, 141-148.
- 3) 田村房子 (2000) : 臨地実習における看護学生の看

護者としての認識への発展過程の構造, 千葉看護学会誌, 6 (2), 47-53.

- 4) 前田ひとみ, 永田まなみ (2000) : 臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響, 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 10, 11-19.
- 5) 近藤裕子, 近藤美月他 (2003) : 看護学生の看護に関する認識—入学時と1年終了直前の記述調査からの比較—, 日本看護研究学会誌, 26 (3), 300.
- 6) 関谷由香里, 酒井淳子, 青木光子他 (2005) : 看護学生の「看護」に対する認識の変化 (第1報), 愛媛県立医療技術大学紀要, 2, 29-35.
- 7) 庄司和晃 (1979) : 仮説実験授業と認識の理論, p.153, 季節社.
- 8) 前掲書7), pp. 153-179.
- 9) 戸坂 潤 (1989) : 認識論, 青木書店.
- 10) 前掲書7), p156.
- 11) 橋元良明 (1998) : メッセージ分析, 人間科学『研究方法ハンドブック』, 高橋順一, 渡辺文夫, 大淵憲一他編著, pp. 75-86.
- 12) 前掲書7), p155.
- 13) 榊原守, 飛田純子, 野田宏美他 (2001) : 看護基礎教育に生かす認識の理論, 第32回日本看護学会看護教育論文集, 140-142.
- 14) 前掲書7), p157.

---

## 要 旨

本稿では, 平成17年度より実施している, 看護学生の「看護」に対する認識に関する縦断的研究の, 第2回目の調査結果について報告する。

この度の調査では, 8名の学生 (質問紙回収率13.3%) から95の記述が得られた。これらの記述を内容分析し, その結果を第1回目の調査結果 (以下, 前回の調査結果という) と比較・検討した結果, 学生の「看護」に対する認識の変化について, 以下の結果が得られた。

1. 前回の調査結果と比較すると, 記述の表現は, 具象的から半抽象的な表現がみられるようになった。つまり, 認識の段階として, 前回の調査結果の, 認識の [前段階から第1段階] からさらに, 認識の [第1段階から第2段階] へと発展していた。
2. 今回の調査では, 多くの記述に専門用語が用いられており, 前回の調査結果のような, 設問と記述との齟齬はほとんどみられなかった。
3. 1年次は, カリキュラム上, 学内における講義・演習が主となり, 認識の発展としては「のぼる道」をたどっていた。しかし, 一度の臨地実習の体験によって, 「おりる道」をたどり, 認識の中身が豊かになっていることを示す記述がみられた。

